

戦後の日本画
鑑賞ポケットガイド

——日本画編——



かとうえいぞう せきてい
加藤栄三 《石庭》 1955年
紙本着彩 179×128 cm

すな いわ
砂と岩

さらさらとした白い砂。

ごつごつとした岩。

画家はこの二つをうまく描き分けています。

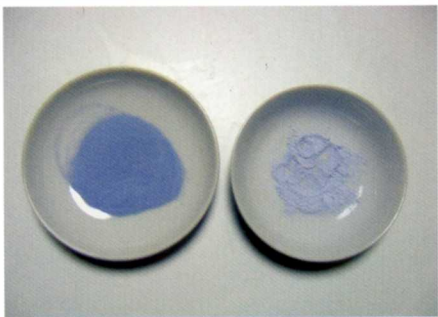
げんせき あら くだ
原石を粗く砕いた絵の具と

こま くだ
細かく砕いた絵の具では

色の濃さも、絵の表面の感じも

違って見えます。

粒の大きい左の絵の具にくらべて、粒の小さい右の絵の具は、色がうすくなる。
(撮影:女子美術大学日本画研究室)



うえむらしょうこう ぼん
上村松篁 《鶴》 1959年
紙本着彩 130×194 cm

くう き
空気

6羽の鳥が、霧か霏の中で

静かに羽ばたいています。

鳥を囲むやわらかな空気。

日本画のつやのない落ち着いた色合いは

油絵の色彩とは違った表現を見せてくれます。



もちつきしゅんこう ち
望月春江 《地》 1963年
紙本着彩 107.5×164.5 cm

せん
線のかたち

線によって現われるもののかたち。

よく見ると、その線の濃さや太さは

さまざまに変化しています。

たよう
多様な線の表現によって

ひとつのもののかたちが

えが
描き表わされています。



よしおかけんじ たいよう ふ しちよう
吉岡堅二 《太陽と不死鳥》 1964年
紙本着彩 126×144.3 cm

ぬ かさ 塗り重ね

にほんが ふとうめい
日本画の絵の具は不透明で

下の色が透けたり

色が混ざり合ったりはしません。

だけど、重ねた色を筆でこすると

かすれて、下の色が現われます。

そうして描きこんだ色や線の表現に

絵の深みが生まれます。

右：透明水彩絵の具で色を重ねたものの。下の色が透けているのがわかる。
中：日本画の岩絵の具を重ねたもの。
左：塗り重ねた岩絵の具を、一部だけ落したもの。（撮影：女子美術大学日本画研究室）



ほりふみ こ む ひょう
堀 文 子 《霧 氷》 1982年
紙本着彩 158×229 cm

かんさつ
観 察

静かにまっすぐと立ち並ぶ木々。

冷たい空気こおに凍った葉は

白く輝かがやいています。

だけど、木こおによって凍り方が

違っているようです。

繰くりかえかえし同えがじょうに描えがいた木々も

画えが家は一本一本をよく観かんさつ察して

描えがいています。



あさだ たかし いわお
麻田鷹司 《嵩》 1960年
紙本着彩 99.5×129.5 cm

ものの質感^{しつかん}

画面いっぱい立ちふさがる

切り立った岩壁^{がんべき}。

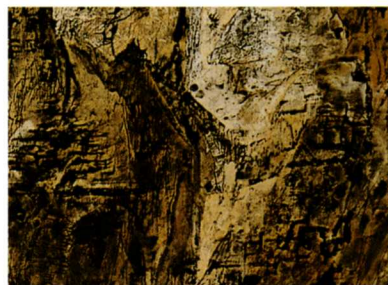
画家は岩の質感^{しつかん}を出すために

金や銀の箔^{はく}を貼^はってこすったり

絵の具^ぬを塗り重ね^{かさ}たりしています。

描かれた岩の質感^{しつかん}は

箔^{はく}や絵の具^{しつかん}の質感^{しつかん}でもあります。



おぐら ゆき ぼたん
小倉遊亀 《牡丹》 1984年
紙本着彩 55.2×46.3 cm

ち えがら
地と絵柄

えがら
絵柄を描くための背景を

ち
地と言います。

きんぱく ち
金箔によって作られた金色の地の上で

ぼたん い い
牡丹の花は活き活きと

表わされています。

ち えがら かんけい
地と絵柄との関係は

こうか ようそ
絵の効果を定める大きな要素となっています。





作品にはさわらないようにしましょう。



展示室のなかでは写真はとらないでください。



展示室のなかではボールペンやサインペンは使えません。



展示室のなかでは走らないでください。
他人のめいわくにならないよう、楽しく鑑賞しましょう。

所蔵品に見る
戦後の日本画
片岡球子・荏司福・上村松篁・・・
鑑賞ポケットガイド—日本画編—

2007年9月29日[土]—12月16日[日]
神奈川県立近代美術館 鎌倉別館

編集：神奈川県立近代美術館
(担当：平井鉄寛・是枝 開)
制作：印象社

神奈川県立近代美術館 鎌倉別館
〒248-0005 鎌倉市雪ノ下2-8-1
TEL. 0467-22-7718
<http://www.moma.pref.kanagawa.jp/museum/>

